



能登の里山で自然資源活用を学ぶ研修員

テーマ： 魅力の課題別研修に迫る

— 目次 —

■巻頭メッセージ	…… 1
■メインピックス：魅力の課題別研修に迫る	…… 2
・人と自然の関係を見つめ直す	
— 北陸で学ぶ課題別研修「持続可能な自然資源管理を通じた自然共生社会の構築」—	
・課題別研修「森林等自然資源の持続可能な利用とバリューチェーン強化」	
・自国の保護区管理に生かす学びとは	
— 課題別研修「保護区における陸域・湿地生態系管理」の魅力 —	
・森林×テクノロジーで地球を守る！ ～課題別研修「森林リモートセンシング」	
■キャリア形成インタビュー	…… 8
・JICA 長期専門家（モーリシャス）山田一夫さん	
■コラム	……10
・専門員退官記念寄稿	
・森と海の保全隊活動報告	
・課題別研修「持続可能な森林経営のための政策立案能力の強化」と民間連携	
■着任・離任挨拶	…… 13

■ 巻頭メッセージ ■

JICA 地球環境部 次長 兼 森林・自然環境保全グループ長 小島 岳晴

三村さんの後を引き継いで着任しました小島岳晴と申します。変わらずにどうぞよろしく申し上げます。今回も多くの方に記事を投稿いただきまして、ありがとうございます。特集は、「魅力の課題別研修に迫る」です。皆さんの記事を拝読していると、どれも生き生きしていること！この後に紹介する「月刊 BIRDER」に負けない内容です。ぜひ本号も最後までお読みください。

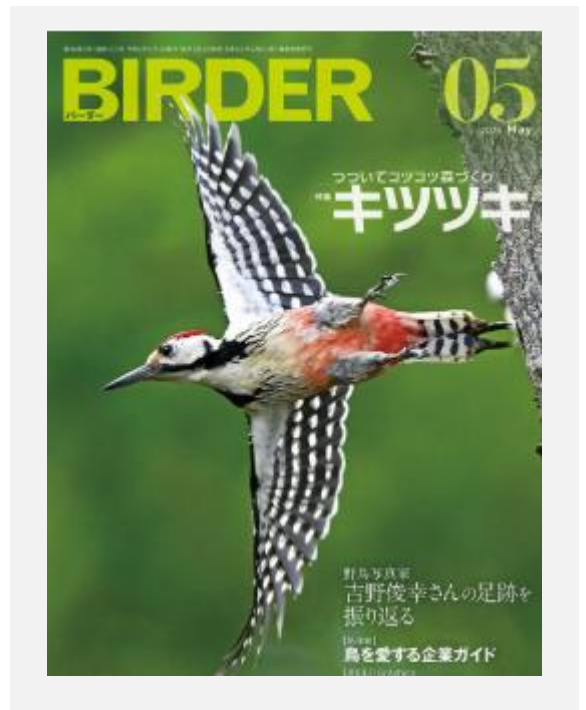
さて、小職は、今でも新聞を購読しているのですが、記事以外に楽しみにしているのが、紙面下半分の広告欄。その中でも、各業界誌の広告にはいつも目を引かれます。カフェ業の「CAFERES」、養豚業の「ピッグジャーナル」、ずばり名称通りの「月刊住職」などなど。実際に買ったことはないのですが、見出しでどんな内容なのか頭を巡らせるのが楽しいです。

さて、当グループに配属されるにあたって、少々冒険してそんな広告欄に載っていた月刊 BIRDER を買ってみました。実に興味深いです。5月の特集は、「キツツキ」。日本では、キツツキの個種名は、アカゲラやコゲラ、クマゲラなど「～ゲラ」と呼ばれるのですが、ゲラの由来は、「てらつつき」で、それが「けらつつき」となり、「げら」に変遷したとのこと。最初の「てらつつき」は、聖徳太子に滅ぼされた物部氏の怨霊が鳥になって聖徳太子の四天王寺を突いて壊そうとした、という伝承らしいです。へえ～。

そういえば、小職は、少なからず鳥に興味があった時期があるのですが、日本のキツツキの個種名が、～ゲラであることについて、不思議に思っていたことを思い出しました。当グループに配属されて、少しでも興味を持って新聞を見て、少しでも奮発したら、些細だけど数十年来の疑問が解決しました。

それ以外にも、クマゲラと白神山地の自然遺産登録の経緯、「都会では、女性よりも男性の方が野生鳥に近づける」という論文の紹介、「バードフレンドリーコーヒー」という取組をする商社の紹介など、奮発した価値はありました。何より掲載されている写真がどれも美しいです。

ゴールデンウィークは終わってしまいました。これから暑くなったり、梅雨になったりして外に出るのが億劫になることもあると思います。そういう時は、大きめの書店で、知らない世界のマニアな業界誌で気分転換してみてもいいかもしれません（在外の皆さんは電子本ですかね）。本部におられる皆さん、「月刊 BIRDER」は、市ヶ谷駅至近の書店と小職の机に置いてますよ。



■ メイントピックス ■

人と自然の関係を見つめ直す

— 北陸で学ぶ課題別研修「持続可能な自然資源管理を通じた自然共生社会の構築」 —



トキ放鳥推進モデル地区の視察

の生活や生業を支えてきました。こうした考え方を背景に、2010年には、環境省と国連大学サステイナビリティ高等研究所（UNU-IAS）が「自然共生社会の実現」を目指す「SATOYAMA イニシアティブ¹」を共同で提唱しました。本研修では、この理念を踏まえつつ、北陸で行われてきた自然資源管理の実践を、研修員の母国や地域の状況と重ね合わせながら学んでいきます。

研修プログラムは、講義、現地視察、研修員同士の意見交換を組み合わせて構成されています。中でも重要な学びの場となるのが、世界農業遺産にも認定されている「能登の里山里海²」です。能登半島では、森林、農地、集落、沿岸域が相互につながり、人の営みを通じて自然資源が活用されてきました。研修では、このような自然資源の活用がどのように地域振興と結びついてきたのかを、環境・経済・社会の視点から総合的に学びます。

また本研修では、自然災害と里山里海の関係にも目を向けています。2024年に発生した能登半島地震は、地域の暮らしや自然環境に大きな影響を与えました。一方で、これまで培われてきた里山里海の知恵や人と自然の関係性は、復興を考える上でも重要な要素となっています。研修では、復興の取組の1つであるトキ放鳥に向けた環境整備を通じて、生物多様性の保全が農業や地域コミュニティの再生とどのようにつながっているのかを学び、復興を将来に向けた持続可能な地域づくりへとつなげる視点を共有します。

本研修には、行政官や研究者など多様なバックグラウンドを持つ研修員が集い、それぞれの国や地域が直

JICA 北陸センター業務課 竹田 美理

課題別研修「持続可能な自然資源管理を通じた自然共生社会の構築（通称：SATOYAMA 研修）」は、研修員が自国における持続可能な自然資源管理や自然共生社会の在り方を考えることを目的とした研修で、自然環境と人の暮らしが密接に関わる北陸地域の特性を活かした学びが特徴となっています。

人間と自然環境の相互関係によって形成されてきた里山里海のような二次的自然地域は、長く人々の



氷見高校による藻場の保全の視察

¹ https://www.env.go.jp/earth/coop/coop/cai/pdf/satoyama_j.pdf

² 「能登の里山里海」情報ポータル：<https://noto-giahs.jp/>

面する自然資源管理の課題について北陸地域の関係者と意見交換し、双方に新たな気づきをもたらします。研修を通じて得られた知見や能登での復興の取組は、研修員によって各国へと持ち帰られ、共有されていきます。このような国際的な発信や対話は、能登の復興の歩みや地域の取組を世界とつなぎ、共創と環流という側面から、北陸の地域振興を下支えする意義も持っています。

SATOYAMA 研修は、自然共生社会の在り方を地域の視点から見つめ直す学びの場です。北陸地域の里山里海での経験が、研修員それぞれの国・地域における持続可能な自然資源管理の取組を考える一助となることを期待しています。

(ご参考：下記は里海に関して JICA が制作したビデオ教材で、能登の里海保全活動を紹介しています)

【農業・農村開発】「里海創生」～人と海との共生のあり方～(ダイジェスト ver.) 約 6 分

https://www.youtube.com/watch?v=GFE2uFW88_U&t=3s

【農業・農村開発】「里海創生」～人と海との共生のあり方～(フル ver.) 約 36 分

<https://www.youtube.com/watch?v=sRvbBlm3u7g&t=1s>

課題別研修「森林等自然資源の持続可能な利用とバリューチェーン強化」

酪農学園大学環境共生学類 客員講師 有坂 美紀

自然環境を維持・回復していくことは私たち人類にとって急務であることはもちろん、世界的に人口が増加している現状においては、より持続可能な自然資源の管理と利用が求められています。課題別研修「森林等自然資源の持続可能な利用とバリューチェーン強化」では上記の背景から、①自然資源管理に関する基礎知識と枠組み、②自然資源管理のための地理情報システム (GIS)・リモートセンシング、ドローンの利用、③地域内外におけるパートナーシップの構築、④認定制度を活用した自然資源の付加価値向上に関わる研修を行っています。

持続可能な地域のあり方は地域によって異なるものの、気候変動や生物多様性に関わる国際動向、環境省の自然共生サイト (OECM) や FSC 等の国際的な自然保全政策は、環境保全と経済活動の両立を目指した世界共通の枠組みであり、持続可能な地域づくりに有効です。本研修では国際的な枠組みを活用した地域を複数訪れ、多様な地域のあり方に触れます。加えて、環境行政、人口動態、認証制度などに関わる座学や、地域や分野を超えたパートナーシップづくりの実習なども取り入れつつ、研修員自身が持続可能な地域に欠かせない要素や手法を発見するディスカッションの機会を多く取り入れています。



黒松内町「歌才ブナ林」を視察

【持続可能なコミュニティの共通点を探る】

北海道下川町では FSC 認証林を軸とし、カーボンクレジットの販売や木材生産、未利用端材等を活用し

たバイオマス燃料、枝葉のエッセンシャルオイル生産など、木質資源を持続可能かつ無駄なく使用している仕組みを視察します。この仕組みが成立している背景には住民を巻き込んだ協働によるまちづくりが挙げられますが、視察終了後に振り返りのディスカッションを行うことで地域のサステナビリティについて理解を深めていきます。

北海道黒松内町では、町民が森林を守ってきた歴史やリジェネラティブ農業、OECM に登録されている歌才湿原など生物多様性保全を軸とした地域活性化の取り組みを視察します。黒松内町が進めている「地域外のステークホルダーと連携することによる経済と環境保全の両立」をテーマとしたディスカッションも行っています。

兵庫県豊岡市では、ラムサール条約登録湿地でもあるコウノトリの野生復帰と生息地の保全のために、自治体、農業者、市民団体、地域住民らが協力し、生物多様性に配慮した農業や地域づくりの様子を視察します。いずれの関係者も共通するコウノトリのストーリーを語る様子に注目してもらい、地域で生み出す持続可能なバリューチェーンの要素についてディスカッションを行います。

【自然資源管理のための GIS とリモートセンシング】

サステナブルな自然資源管理には、地域資源の土地利用の仕方を俯瞰的・長期的に見る知識や技術も欠かせません。このため、視察前に GIS やリモートセンシングの基礎知識を学び、視察後には視察先の下川町を事例として、GIS を活用した森林のゾーニングを行います。

ただし、本研修の目的は、GIS やリモートセンシング、ドローン操作といった技術そのものの習得ではなく、それらが自然資源管理において有効なツールであることを理解してもらうことにあります。このため、地図を用いた合意形成の手法であるコミュニティマッピングの実習も行い、当該技術を合意形成に活用する実習も設けています。

本研修を通して世界各地にサステナブルな地域が生まれ、持続可能なバリューチェーンが広がっていくよう、関係者の皆さまに協力をいただきながら今後も取り組んでいきたいと思っております。



自国の保護区管理に生かす学びとは

— 課題別研修「保護区における陸域・湿地生態系管理」の魅力 —

JICA 北海道センター（帯広）道東業務課 西垣 美佐子

【研修の背景と概要】

2022 年に開催された生物多様性条約第 15 回締約国会議（COP15）では、「昆明—モントリオール生物多様性世界枠組み」が採択されました。この枠組みでは、2030 年までに陸域と海域の少なくとも 30% を適切に保全する、いわゆる「30by30 目標」が掲げられています。

この目標を達成するためには、保護区及びその周辺区域（国立公園等の自然公園、ラムサール条約登録湿地等）や OECM（自然共生サイト等）などにおいて、管理の質を高めていくことが欠かせません。また、行政だけでなく、地域住民、民間企業、非営利団体、大学など、多様な主体が連携しながら、生物多

様性の保全に取り組むことが重要です。

本研修は、こうした背景を踏まえ、日本の政策や制度への理解を深めるとともに、さまざまな立場の関係者が協働して行う保全や再生活動を、実例を通じて学ぶことを目的としています。

対象とするのは、主に陸域および内陸湿地の保護区とその周辺地域です。研修では、科学的な調査結果に基づく自然環境の調査や評価、保全活動の普及や啓発の取組などを通じて、効果的な保護区管理と自然資源の持続可能な利用に必要な知識の習得すること、そして自国の保護区管理における優先課題を整理し、それぞれの国の状況に即した行動計画を作成することを目標として、2026年度から実施する予定です。



漁業者による国立公園内のエコツーリズム

【北海道はリソースの宝庫】

本研修の大きな特徴の一つが、北海道（道東地域）を主な研修地としている点です。北海道には7つの国立公園と4つの国定公園があり、多様で豊かな自然環境が広がっています。なかでも釧路湿原は、日本で最初にラムサール条約登録された湿地であり、国内最大の面積を誇ります。

本研修では、こうした北海道ならではの強みを最大限に生かし、保護区における生態系管理について、多様な視点から学ぶ内容を計画しています。

【現場から学ぶ研修内容】

研修序盤は、環境省など中央省庁から講義を受け、日本における保護区やその周辺地域の制度、保全管理の仕組みや特徴について理解を深めます。

その後、道東地域を中心に、現場での事例を基にした講義や視察を行います。具体的には、地域住民が主体となって行う自然再生活動、民間団体によるナショナルトラスト活動、観光と自然保全を両立させる持続可能な観光の実践、多様な関係者による協働の在り方などを取り上げます。また、水産資源の持続可能な利用や、民間企業による森林管理、地域との合意形成の工夫なども学ぶ予定です。

【帰国後の活用につながるプログラムを】

研修では通常、研修終盤に参加した研修員に研修内容の評価や意見を聞き取るためのアンケートを実施し、次回以降のプログラム改善に生かしています。本研修では、湿地生態系の活用をテーマとし、主に道東地域で実施していた研修に参加した研修員から寄せられた様々な意見を参考として、プログラムを作成しています。

過去の研修で特に評価が高かったプログラムは、持続可能な観光、生態系がもたらす恩恵の考え方、地



釧路湿原の市民参加型環境調査に参加する研修員

域住民との話し合いや合意形成に関する内容でした。中でも、市民による自然環境の調査や、ボランティアパークレンジャーによる保護区管理への参加といった、地域住民が主体となる取組紹介は高く評価されています。実際にボランティアと共に調査活動に参加した経験は、強い印象として記憶に残り、自国での取組を考える上で大きな刺激となったようです。

本研修でも、こうした実践的で参加型の内容を取り入れ、研修後にそれぞれの国での取組につながる発想が広がるプログラムを提供していきたいと考えています。

森林×テクノロジーで地球を守る！ ～課題別研修「森林リモートセンシング」

JICA 北海道センター（札幌）研修業務課 シンジェー ボロルチメグ

課題別研修「森林リモートセンシング」では、豊富な知見を持つパートナーと共に北海道の強みを最大限に活用した学びを提供しています。

世界では森林の劣化・減少が進み、地球温暖化を防ぐうえで重要な役割を果たす二酸化炭素の吸収源が失われつつあります。しかし、多くの国では、森林の状態を正確に把握するための専門家や技術が不足しています。本研修では、衛星画像から森林の状況や変化を読み取る「リモートセンシング」と、地図作成や森林管理に活用する「地理情報システム（GIS）」の基礎を学びます。参加者はこれらの技術を用いて自国の森林データを作成し、森林の保全・管理計画に役立てることを目指します。

【北海道の現場で学ぶ、理論と実践の融合】

本研修の目玉は、森林資源が豊富な北海道での実地研修です。全国でも最大の森林面積を有する北海道では、多様な森林生態系が広がっています。また、森林管理や自然環境保全に関する研究機関・自治体・民間団体が数多くあり、実地研修に適した環境が整っています。

プログラムは、東京での講義・視察と、北海道での講義・実習を組み合わせた構成となっています。北海道での研修では、実際の森林をフィールドに、調査手法やデータ活用の具体的な事例を学びます。研修員は、衛星データを用いて森林被覆の変化を解



帯広の森の中でドローン実習をする研修員

析し、減少が疑われるエリアを地図上に可視化したうえで、現地に入り、地上調査やドローンによる空撮を通じて、衛星で捉えた変化が実際にどのように起きているのかを確認します。

この「解析→現地検証→整理」という一連の流れを体験することで、研修員はデータを読み取る力に加え、時間や人員の制約がある中、どこを優先的に確認し、どのように適切な森林管理へ結びつけるかといった実務的な視点を身につけていきます。

本研修の受託先である酪農学園大学は、1998年にGISソフトウェアを導入して以来、GIS/GPS/リモートセンシングの分野において研究・教育に取り組んできました。特に、環境分野におけるこれらの技術の活用については、国内のみならず国際的にも高く評価されています。また、2011年度からは自然環境の保全や地理情報の活用をテーマとした課題別研修を別途実施しており、研修内容の提案や講師・実習先の

選定、研修員へのサポートなど、研修運営体制も万全です。

【研修後も続くフォローアップと人材育成】

本研修は 2011 年度に始まり、これまで 36 ヶ国 194 名の研修員が参加しています。研修では、研修期間中の学びにとどまらず、研修後のフォローアップにも力を入れています。2022 年度および 2024 年度には、帰国研修員を対象としたオンラインセミナーを実施し、帰国後の取り組み状況や課題を共有する機会を設けました。オンライン上で再び顔を合わせることで、研修で得た知識を実務にどのように活かしているのかを振り返り、次の改善につなげています。こうした継続的な関わりを通じて、研修の成果を一過性のものにせず、各国の森林管理の現場で実際に役立つ力へと育てています。JICA 北海道センター（札幌）では、今後もテクノロジーと人材育成を通じて、持続可能な森林管理に貢献していきます。



JICA 北海道センターの公式 Facebook では、本研修の様子や研修員の紹介を発信しています。以下のリンク先又は QR コードよりぜひご覧ください。

https://fb.watch/Ax_5bRXXGu/



■ キャリア形成インタビュー ■

山田 一夫 さん



インタビュアー：JICA 地球環境部 森林・自然環境保全グループ 毛笠 貴博

山田一夫：モーリシャス国統合的沿岸域生態系管理システム構築（ICEM）プロジェクト 業務調整／環境教育専門家。製造業の IT 部門および外資系コンサルティングファームを経て、環境保全分野への転身を志す。環境 NGO に所属する傍ら、気候変動とサンゴ群集動態の相互作用を研究。JICA 特別嘱託を経て、現職。海をこよなく愛し、ダイビングを嗜む。訪問国は 61 개국。環境学博士。

① ご経歴について、教えてください。

キャリア初期は製造業でテレビなどの家電開発を志望していましたが、数学専攻を背景に製造プロセスを支える IT 部門に配属され、CAD／CAE などの設計・製造支援システムや、固定費削減を目的とした IT 導入による業務改革に従事しました。その後、外資系コンサルティングファームを経て製造業に戻り、全社システムの IT トランスフォーメーションを担当。国内外製造拠点への導入後、事業部で電子マネーの海外展開やデジタルシネマなどのプロジェクトに携わりました。特にデジタルシネマでは全米の劇場を巡回し、導入に伴う各種手配から交渉、進行管理までを一貫して担いました。その後、環境 NGO へ転職し、大学院で生態学を学びながら研究を進め博士課程を修了。JICA 特別嘱託を経て、現在はモーリシャスで ICEM プロジェクトに従事しています。

② 自然環境保全分野の関心を持ったきっかけは？

趣味で国内外の世界遺産を巡る中で、グレートバリアリーフを訪れるためダイビングライセンスを取得しました。海中では、婚姻色に変化するハナダイや擬態するピグミーシーホースなど多様な生物に触れ、生態系の豊かさと繊細さに強く惹かれました。

一方で、沖縄やフィリピンではサンゴ礁の衰退や魚類の減少が進み、希少な固有種を目にする機会が減っている現実にも直面しました。この経験から、海洋環境の劣化に対して自分にできることを考えるようになり、環境分野に関わりたいという思いが芽生えました。

③ 民間企業から JICA へと転職された経緯や動機は？

GAFAM の台頭や中国製造業の成長を背景に IT 分野で一定の達成感を得る一方、関心のあった環境分野への挑戦を志し、大学院へ進学しました。当初は製造業の CO2 排出削減に関する研究を考えていましたが、上智大学の田中教授から「サンゴに関心があるなら生態学を学ぶべき」と助言を受け、特に種間相互作用や環境攪乱下における群集の時空間的遷移を扱う群集生態学に関心を深め、この分野へ進みました。

修士課程では数理モデルを用いて気候変動とサンゴ群集の動態を研究しました。モデル改良に取り組むうちに研究が深まり、気づけば博士課程に進んでいました。仕事と研究の両立は容易ではありませんでしたが、心地よい緊張感の中、非常に密度の高い充実した時間を過ごしました。

その後、震災関連研究に携わる中で JICA 案件を紹介され、フィールドで実践的に環境保全に関わりたい

との思いから参画を決めました。

④ JICA 本部での勤務経験や現在のモーリシャスでの活動について教えてください。

本部での勤務は、現地赴任に向けた重要な準備となりました。民間企業とは異なる業務プロセスや制度を理解できたことで、プロジェクトの立ち上げから実施までを俯瞰的に捉えられるようになりました。また、沿岸域に限らず、森林火災や難民支援といった分野にも関わる機会を得て、国際協力の幅広さと複雑さを実感しました。

現在は、沿岸生態系の保全を目的としたプロジェクトに従事しています。サンゴ礁、マングローブ、海草藻場の回復に取り組むとともに、モニタリングに基づく再生手法の確立や、エコツーリズムを通じた地域主体の収益創出を支援しています。各機関や専門家チームの業務調整を担う傍ら、広報を含む環境教育分野を担当し、展示施設やフィールド活動を通じて生態系や NbS (Nature-based Solutions) の理解促進に取り組んでいます。一方で、行政との調整や意思決定プロセスの違いにより計画どおりに進まない場面もあり、制度や文化の違いを踏まえた柔軟な対応の重要性を再認識しました。



JICA プロジェクトにご協力いただいた「Centre de plongée Exploration sous-marine」のピエール氏（右から4番目）とスタッフの皆さん

⑤ これから自然環境保全分野でキャリア形成をされる方へのメッセージ

キャリア選択において、私は常に「何か面白いこと」を最優先に考えてきました。自然環境保全は短期間で成果が出る分野ではないため、興味や好奇心を原動力に継続することが重要です。続ける中で思いがけない機会が訪れ、挑戦することで新たな学びや経験に出会えます。

また、人気分野に人が集中する一方で、海草や汽水域など視点を変えることで専門性を発揮しやすくなる場合もあります。長期的に活動するためには、大学院などで体系的な知識を身につけ、自分の専門性を確立することが大切です



プレスツアー（2026年2月18日、アルビオン水産研究センター）にて、ICEMプロジェクトによる生態系回復と地域協働の取り組みを紹介

⑥ これから大学院進学を検討されている方へもメッセージをお願いします。

私が在籍していた研究科には、アジア、アフリカ、中東、中南米など世界各国から、日本の技術を学び自国の政策に活かそうとする多様なバックグラウンドを持つ仲間が集まっていました。こうした学習の場の中で、人種や性別、国境を越えて集った多様な背景を持つ仲間と共に学び、議論し、経験を共有できる環境は非常に貴重です。修了後、仲間たちは国連や政府、研究機関、大学などさまざまな分野で活躍しており、そうしたつながりはかけがえのない財産となっています。このような場で、「何か面白いこと」には必ず出会えます。ぜひその一歩を踏み出してみてください。

■コラム■

国際協力専門員退官記念寄稿

“We must look after forests so they look after us”

元 JICA 国際協力専門員 三次 啓都

気候変動対策、生物多様性が主流化して以降、カーボンニュートラル、グリーンインフラ、NbS (Nature-based Solutions)、ネイチャーポジティブ等、続々登場する環境関連の概念を示す言葉に、森林（あるいは林業）が凌駕されています。森林だけでなく、水産などもそうでしょう。新しい概念は、政策誘導や資金配分、あるいは市場の変容をもたらし、環境にポジティブな方向へ人々を誘導していきます。その一方で、昔から人々の側にあり、地域住民や先住民の生計、都市部の生活や食料システムを支えてきた森林が、それらの概念に埋没されかねないことに少なからず危機感を持っています。やや大雑把なことを言えば、気候変動対策には予算が配分されるものの、気候変動対策の緩和・適応に大きな役割を果たしている森林セクターには予算が配分されない（全くないということではないが、配分がかなり少ない）ということです。無論、森林がなによりも大事だと、言っているわけではありません。気候変動対策には、保健・医療やインフラなども大きく関わっており、温暖化に伴う感染症対策、防災といった視点から重視されています。この違いは、個人的な推察ですが、森林は短期的な便益には結びつきにくいことに加え、所謂、国益、インフラ輸出や民間進出には馴染まないという点があると思います。

では、これで良いのでしょうか？ 森林は、開発援助のコンテキストにおいても経済面だけではなく、住民参加、ジェンダー、地域住民の生計向上と資源管理、という点から事業展開をしてきたセクターです。SDGs、あるいは気候変動対策、そして人間の安全保障の点からもその必要性は揺るぎないでしょう。森林を持続的に管理することは、私たちに恩恵をもたらすことは明白なのですから。

課題は、そのような森林の特性と重要性を内外に発信し、他セクターと統合的に取り組んでいく戦略を持ち合わせることでしょう。少なからず、専門員勤務時には、内外でこのようなナレッジの発信に努めてきましたが、何よりこのような取り組みは、森林分野の国際協力活動や研究に関わる人々の貢献によることは言うまでもありません。森林を自然環境分野のアイコンに掲げ、様々な分野との連携やポスト SDGs を視野においた活動をより一層進めて欲しいと願っています。JICA の籍からは離れますが、International Forestry にはこれからも関わってまいります。是非、一緒に動いてまいりましょう。

最後にこの寄稿文のタイトルの元となった、メディアへの投稿を紹介しておきます

(URL : <https://news.trust.org/item/20190320135552-d072o/>)。



ボスニア・ヘルツゴビナ モスタル近郊の山から 森林再生の現場を臨む

森と海の保全隊活動報告 「楽しいのその先に」

JICA 青年海外協力隊 2024 年度 2 次隊 ペルー国派遣 環境教育
国家自然保護区管理事務局-タバコナス・ナンバジェ国立保護区出張所配属

岡本 あずみ



保護区緩衝地帯集落での環境教育

日本の約 3 倍の国土を誇る南米ペルー。砂漠・険しい山岳地帯・熱帯雨林が織りなす多様な生態系、先住民の文化、ジョーク好きな国民性、そして世界に誇る美食。魅力溢れるこの国について、たった 2 年間ではその一部しか知ることができないと感じています。

「環境問題に対して行動したい」その思いで志した協力隊。多くの方々の支えがあって今この地に立てていることに改めて感謝申し上げます。

帰国後、霧に包まれたあの森・停電の夜・暑い日にお腹丸出しで歩くおじさん達、様々なペルーを思い出し、恋しくなることは間違いありません。

活動先である「タバコナス・ナンバジェ国立保護区」はエクアドルとの国境、有機コーヒーの町として有名なサンイグナシオ郡に位置します。北アンデス山脈の南端に位置する保護区は、特殊な“パラモ生態系（高山帯生態系）”、雲霧林、絶滅危惧種（メガネグマ・ヤマバク・ポドカルプ属の樹木等）を守るため 1988 年に設立されました。

新種の生物も度々発見され、さらに地域の水源でもある貴重な場所ですが、周辺住民による森林火災・違法伐採、違法採掘等の危機にさらされています。それらから保護区を守るべく、現在は配属先と協力し、地域住民への環境教育や配属先の SNS の運営等に取り組んでいます。

この一年、「自然にポジティブなイメージを」を目標に、ゲームや視覚的教材を使った参加型の授業やイベントを実施してきました。結果、授業アンケート対象の生徒 100%が「楽しかった」と回答し、「もっと保護区のことを知りたい」という声が多く寄せられました。すぐに行動に結びつくとは限りませんが、それでも、一人でも多くの方が自然へ興味を持つことは、環境保全に不可欠な一歩だと信じています。

近年ペルーでは、金価格の高騰に伴う違法採掘が深刻化しています。金の精錬の際に水銀が使用され、ほとんど未処理のまま河川へ流出します。残念ながら、私の任地でも違法採掘に伴う環境汚染が始まってしまいました。今私たちが手に持っているスマートフォンにも金は使用されています。持続可能な社会を語る者の手元



違法採掘の影響で常に茶色い川と採掘中の穴（赴任地）以前は半透明だった。

には常に最新機器があり、「より安定した資産を」と金に投資します。その裏側で、ペルーの川は水銀に汚れ、誰かの故郷が危険に脅かされています。私たち日本人も、この略奪の構造と無関係ではありません。我々は既に、十分すぎるほど豊かです。見栄や少しの便利さ、安さのために消費を重ねる風潮を、私たちは今、変えなければなりません。

その一方で、日本・ペルー両国において先人たちが命がけで守り抜いた大自然が今なお残っているのも事実です。私自身、幼少期に自然の中で遊び感動した経験が今の原動力となっています。『楽しい』『知りたい』という感情は、単なる娯楽ではなく、人の行動変容を促すための強固な土台であると考えます。楽しいのその先に、自らの意志で『守りたい』と動く人を一人でも増やせるよう、現地の方々と協力し今後も活動に励みます。

課題別研修「持続可能な森林経営のための政策立案能力の強化」と民間連携

(公財)国際緑化推進センター (JIFPRO) 事務局長 高原 繁

【課題別研修「持続可能な森林経営」について】

本課題別研修は、開発途上国の森林管理や森林保全に従事する政府職員を対象に、日本の森林・林業行政の現状や、森林を取り巻く国際的な議論の動向、日本の学術・産業界等における先端的な技術・活動を学んでいただき、それらを活かして、帰国後実施するアクションプランを作成することを内容とする約1か月のコースとなっています。2024年にはアジア・アフリカ等から12カ国・12名、2025年にはアジア・アフリカ・南米等から12カ国・12名が参加しました。

研修では、林野庁などによる森林・林業政策などに関する幅広い講義のほか、視察や実習なども重視しており、森林総合研究所や林木育種センター、京都大学生存圏研究所などでの森林に関する最先端の研究に関する講義・視察を行ってきています。また、地方自治体での先進的な取り組みとして、山梨県小菅村でのエコツーリズムや木質資源の堆肥やエネルギーとしての効率的利用の取組、岡山県真庭市のCLTを利用した建築やバイオマス発電などの木材資源の循環利用、高知県馬路村での木材工芸品やユズ製品を通じた村おこしなどの視察も行いました。



岡山県銘建工業のCLTによる木造社屋の視察

【民間企業との連携】

本課題別研修では、特に民間企業との連携も強めてきています。開発途上国では、国内の木材需要の拡大と付加価値向上が持続的森林管理へ向けた課題の一つになっています。

研修では、木材製品の製造企業として茨城県の住友林業クレスト(株)、愛媛県の(株)サイプレススナダヤ、岡山県の銘建工業(株)などを訪問・視察するとともに、都市の木造化など日本の先進的な木造建築の分野に関連してライフデザインカバヤ(株)や(株)シェルターの講義や建築の視察を実施しました。

また、小菅村でのプログラムでは、同村との協定により自然環境保全活動を行っている大成建設にもご参加いただき、都市部の企業による源流域の森林管理への貢献というテーマで、研修員からの発表も交えて意見交

換を行う交流セッションを実施しました。

さらに、開発途上国でのビジネス展開に関心を持つ民間企業とのセッションを実施しました。「森から世界を変えるプラットフォーム」の会員企業からの希望を募るなどして、最先端の森林モニタリング技術や森林カーボンクレジットに関するビジネス、木材保存処理、おがくずなどによるブリケット製造、油性種子生産のための植林など、森林に関するビジネス展開を行う様々な企業と研修員との情報交換のためのセッションを行いました。

研修の最後には、研修員によるアクションプランの発表が行われましたが、この発表についても「森から世界を変えるプラットフォーム」の会員にもお知らせし、希望の会員はウェブ参加による発表視聴を行なえるようにしました。

これらの民間企業との連携は、個別ビジネスを直接的に支援するものではありませんが、研修を通じた情報交換が将来的な B toG のビジネス展開につながることも期待しているものであり、帰国後の研修員から企業に対し問い合わせがある旨も聞いているところです。



山梨県小菅村関係者・大成建設との交流セッション



■着任の挨拶■

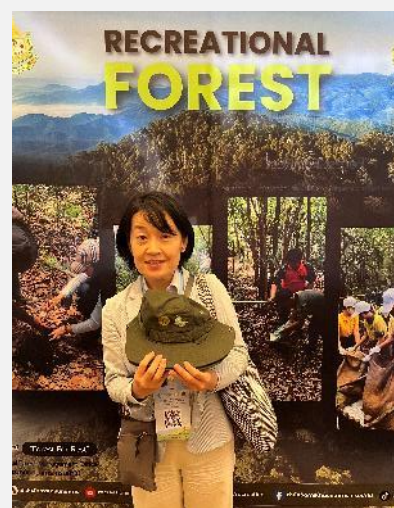
JICA 地球環境部 参事役 田端 朗子

皆さん、こんにちは。この度、林野庁より来ました田端朗子（たばたあきこ）です。

林野庁では、海外林業協力室や木材貿易対策室で国連森林フォーラム（UNFF）、FAO、ITTO、モントリオールプロセス等の多国間協力に携わっておりました。現場は北海道のオホーツク地方で森林官、空知地方で治山業務に携わり、朝から晩まで収穫調査や溪流調査等をしておりました。晴れた青空の下、山スキーを履いての収穫調査は見渡す限り白銀のパウダースノーで最高です（お握りが凍るマイナス 10 度の世界ですが…）。

バレエと温泉と森林浴が大好きです。こちらで色々学ばせていただきたいと思っております。

どうぞよろしく願いいたします。



APFC31@チェンマイでタイ王室
林野庁レンジャー帽子をゲット！

私は 1999 年に林野庁に採用され、約 26 年間国家公務員として勤務した後、この 4 月に JICA に国際協力専門員（自然環境保全）として入構しました。

略歴となりますが、公務員として駆け出しの 8 年間は北海道の知床、北見、そして霞が関において、国内の森林・林業行政に従事しました。その後、在ケニア大使館に派遣されましたが、これが契機となり、私のキャリアは海外、とりわけアフリカでの国際協力業務へと大きく舵を切ることとなりました。

ケニアから帰国後は、農水省国際部、マラウイ森林局（森林保全管理アドバイザー）、林野庁海外林業協力室（課長補佐：REDD+、JCM 等担当）、コンゴ民主共和国環境省（森林・気候変動対策アドバイザー）など、アフリカ諸国と日本の行政機関を行き来しながら、特に森林・気候変動分野において「行政官」としてのキャリアを重ねてきました。

今後は、これまでの知見を還元しつつ、自然環境分野における ODA 事業の戦略的な実施と効果の最大化に少しでも貢献できるよう、日々の業務に積極的に取り組んで参ります。ご支援ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い致します。



コンゴ盆地の木材伐採現場にて

2026 年 4 月に自然環境保全第一チームに着任しました加治です。2021 年 4 月より 2026 年 3 月まで地球環境部水資源グループに所属しており、統合水資源管理に関連する案件を中心に担当していました。「流域管理」という観点でも密接に関連する分野であり、今までの経験を生かしつつ、新しいことを学びながら取り組んでいきたいと思います。

話は変わりますが、私が週末よく行く場所に「寺家ふるさと村」（横浜市青葉区）があります。「ここが横浜？」と思えるような雑木林があり、その間に水田が広がります。5 月～6 月にはホタルが飛び交い、幻想的な雰囲気を楽しめます。地域住民にとって憩いとなる里山ですが、2 年程前、寺家にある柿畑の開発計画が持ち上がり、有志によりその保全活動が行われました。近所においても自然環境保全は引き続き重要な課題であると改めて感じました。海外の課題だけでなく、身近な課題にも目を配りながら、業務に取り組んでいきたいと考えています。

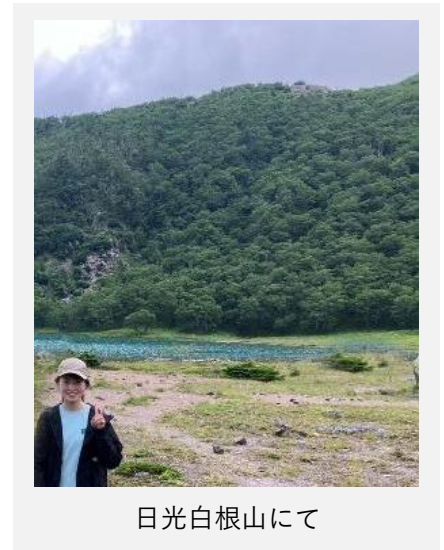
よろしくお願い致します！



寺家ふるさと村の秋の午後

皆さん、はじめまして。

4月より、地球環境部森林・自然環境保全グループとインフラ技術業務部有償技術審査室を兼務する形で着任しました。前職の林野庁では、木材利用推進の立場から資源の活用サイクル構築等に携わってきました。分野は異なりますが、その中で多様な調整を重ねてきた経験は、私の実務の基盤となっています。まずは国際協力の最前線で何が起きているのかを体系的に学び、現地の切実な課題に向き合いたいと考えております。その中で、私の経験がプロジェクトを支える一助となれば幸いです。一日も早く組織の力になれるよう、誠心誠意努めてまいります。ご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



日光白根山にて

■離任の挨拶■

JICA 無償資金協力部（元地球環境部次長 兼 森林・自然環境保全グループ長） 三村 一郎

2024年10月から2026年3月までの間、「自然環境だより」をご愛読いただきましたこと心からお礼申し上げます。また、毎回、同だよりの作成にあたり尽力いただきました編集者の皆様にも改めてお礼申し上げます。短い期間ではございましたが読者の皆様と同じ時間の共有が出来ましたこと大変嬉しく感じていると共に今後は一読者として同だよりの発行を楽しみにしていきたいと考えております。引き続き後任の小島次長含め「自然環境だより」へのご支援どうかよろしくお願いいたします。



最後までお読みいただき、ありがとうございました。

ご意見・ご感想をお待ちしております。（下記のフォームにてお願いいたします）

アンケートフォーム： <https://forms.cloud.microsoft/r/2NNRP6nT4F>

JICA 地球環境部森林・自然環境保全グループ 自然環境保全課題支援事務局

TEL: 03-5226-6656 FAX: 03-5226-6343

e-mail: jicage-nature@jica.go.jp

自然環境だよりバックナンバー

http://www.jica.go.jp/activities/issues/natural_env/nature_info.html